

し出され、右筆に召つかはれたり、是により伊豆島々の事をよくしられたり、故に伊豆七島のさし引を仰付られ、一年江雪齋八丈島仕置として、渡海の時節供して渡りたり。○中女房絹を織、北條家へ貢絹とておさむる故にやむかしより家主は女にて男は入むこなり、佛は五障三従と説給ひて、女に三ツの家なし、此島は世界にかはり男に三ツの家なし、去程に女子を持ぬればよろこび、親の家財跡職をわたし、男子を持ぬれば、すてものに思ひ入聲になす、萬事皆女房のさし引也、此島へ日本の舟著ぬれば、島のおさきもいり先立、國衆をともし、其好の家に入、其家の女房を其妻とさだむるゆへに、女房共天道へ祈をかけ、我家へ國衆いらしめ給へとねがふ、國衆とは日本人をいふ、國衆いらざる家の女は、天道をうらみ身をかこちあへるばかり也、國衆入ぬる家よろこぶ事たとへば、から天竺に住付てゐたる子や親が、不慮の仕合有て歸朝し、二たびあへる心ち、扱又及びなき人を、年月戀詫しがまれにあふがごとし。○中

江雪入道一興の事附男女別の事

むかし清盛公頼朝公の時代に至て、非常の流人おほく遠島す、西は鎮西鬼海が島、北は佐渡が島、東は夷をが島、南は伊豆の大島ならで、遠島のさたなし、それより以來、延徳年中、早雲宗瑞伊豆の國を治給ひしまでも、八丈島の名を聞ず、其比豆州賀茂の住人朝比奈の六郎知明と云侍あり、是より南海に當て島有よし聞及び、大船一艘に入多く取乗、伊豆下田のつより渡海し、彼島につき、民家をなびかし、末代伊豆の國の内たるべき旨申さだめ歸海し、早雲へ此よし告しらしむ、早雲喜悅な、めならず、八丈島見出したるけんしやうに、伊豆の國下田の郷を朝比奈六郎知明子々孫孫、永代他の妨有べからずと云々、故に今知明が孫あさひな兵庫助、下田を知行す、此島より北條家五代、毎年の貢絹をおさむる事、千秋萬歳なるべし。

〔伊豆海島風土記〕一此島○ハ上古に遠流の人在りし事きこへず、慶長のころ、宇喜多の一統を